

本「大往生したけりゃ医療とかかわるな」紹介

2015年2月28日
朝日新聞広告

幻冬舎新書 247

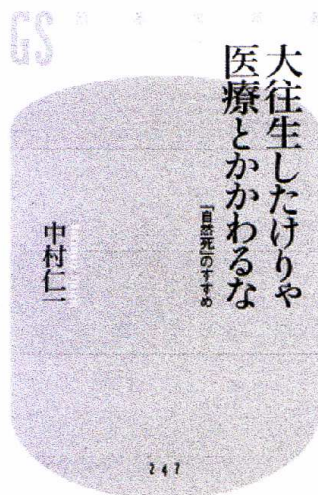
中村仁一

価格 798円(本体760円+税)

発行年月 2012年01月

判型 新書

ISBN 9784344982482



内容

3人に1人はがんで死ぬといわれているが、医者の手にかからずに死ぬ人はごくわずか。

中でもがんは治療をしなければ痛まないのに医者や家族に治療を勧められ、拷問のような苦しみを味わった挙句、やっと思を引きとれる人が大半だ。

現役医師である著者の持論は、「死ぬのはがんに限る」。実際に最後まで点滴注射も酸素吸入もいっさいしない数百例の「自然死」を見届けてきた。

なぜ子孫を残す役目を終えたら、「がん死」がお勧めなのか。自分の死に時を自分で決めることを提案した、画期的な書。

目次

- 第1章 医療が「穏やかな死」を邪魔している
- 第2章 「できるだけ手を尽くす」は「できる限り苦しめる」
- 第3章 がんは完全放置すれば痛まない
- 第4章 自分の死について考えると、生き方が変わる
- 第5章 「健康」には振り回されず、「死」には妙にあらがわず、医療は限定利用を心がける
- 終章 私の生前葬ショー



中村 仁一

1940年長野県生まれ。社会福祉法人老人ホーム「同和園」附属診療所所長、医師。京都大学医学部卒業。財団法人高雄病院院長、理事長を経て、2000年2月より現職。一方、「同治医学研究所」を設立、有料で「生き方相談」「健康相談」を行う。

1985年10月より、京都仏教青年会(現・薄伽梵KYOTO)の協力のもとに、毎月「病院法話」を開催。

医療と仏教連携の先駆けとなる。

1996年4月より、市民グループ「自分の死を考える集い」を主宰

＜中村仁一さんが医師になった1960年代、生活習慣病が広がり始めていた。父親の遺志を継いで医学部に進んだものの、治らない病気を前に悩んだ＞

当時は成人病と言ってましたが、感染症のように投薬や治療で完治する病気じゃないですよ。一生懸命勉強したものの、自分の診ている患者さんが治らないんだと思うと、近代医療にのめり込む心境でなくなってきました。

そして僕自身も40代の時にもすごい不整脈になった。早鐘のように脈打ったかと思うと心臓が2秒半ぐらい怠けるんですよ。胸がつまって夜中に跳び起きるんです。おやじの姿を思い出しました。医療の限界も不確実性も骨身に染みて感じていた薬を飲んで上っ面だけ帳尻を合わせてるのも嫌だったが、何か生きる支えが必要だった。

最初は聖書を斜め読みしたけれどじっくりこない。それで次は仏教の入門書を読みあさったんですね。結構必死でした。そこで「思い通りにならないものを思い通りにしようとするから苦しい」との考えに出会ったんです。楽になった。病気を受け入れてともに生きていくことを学びました。

＜1996年4月、「今を輝いて生きるために」をキャッチフレーズに、「自分の死を考える集い」を京都市内で始めた＞

「死」を頭の片隅に置いて生きることで「生」が締まったものになる。生き方を考える集いだから雰囲気は明るいですよ。先月まで184回も続いたのは、「死」に絡む話をおおびらにできる場がまだ少ないからじゃないでしょうか。

僕自身は「死」を具体的に考えるために、古希を記念して自分で組み立てられる段ボール製の棺おけを買いました。あの狭い空間に横になると執着心が多少は薄れるんです。あの世には何も持って行けないということを実感するんです。70歳を過ぎると根気がなくなり、何か新しいことを始めようという気にはもうならない。棺おけに入るとそういう現実も認められる。

日本人は今、老いを認めたくない人も多いのではないのでしょうか。老いは一方通行だが、それを病気にすり替えてしまうと回復を期待できる。死ばかりか老いも忌避しているように、僕には見える。

＜高齢者施設の常勤医として、自然死を遂げるお年寄りを多数みとってきた＞

末期の胃がんで病院から施設に帰ってきた人がいました。もう何も飲めない食べられない状態で、その時は腹水がいっぱいたまっていたんですが、8日目に亡くなった時はそれが全部なくなっていた。体にある水分を全部使い果たして死んでいったんです。とても穏やかな死でした。「人間ってこんなに精巧にできてるんだ」と驚きました。

こういう死を多数見ていると、自然に死ぬってことはそれほど怖いことじゃないと思えてくる。僕もできればそういう死に方を次の世代に伝えたいと思います。目やら耳やら年々あちこち悪くなってきてますが、そのうち月ごと日ごとに悪くなっていくと思う。それを受け入れて不自由さと仲良くしながら、生きて死ぬ姿を周りに見せたいなと思います。